

## 第3回

子どもを真ん中に親と園はパートナー  
～大人が幸せなとき子どもは、幸せになる～

講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

信頼関係を築く上で、保護者の気持ちを理解することが最も大切です。保育者は、集団保育の場面における専門家として、子どもの発達や育ちを保障する仕事です。保護者と手をつないでいかなければ子どもの成長を保障していくことは難しいです。子どもの幸せのために、保育者は「子どもを真ん中に親とパートナーになる」時、子どもは幸せになることを理解し、心に留めておいてほしいと思います。

## 『子どもたちからおとなへのメッセージ』

2001年に神奈川県川崎市で「川崎市子どもの権利に関する条例」が施行されました。その市民報告会で子どもが読み上げたメッセージです。

「まず、おとなが幸せになってください。おとなが幸せじゃないのに子どもだけ幸せにはなれません。おとなが幸せでないと、子どもに虐待とか体罰とかが起きます。条例に“子どもは愛情と理解をもって生まれる”とありますが、まず家庭や学校・地域の中で、おとなが幸せでいてほしいのです。子どもはそういう中で、安心して生きることができます。」これは、子どもから見た視点です。親が幸せになったとき、子どもも幸せになれるのです。

## I. 子どもが育つ3つの世界

子どもが生まれてから一番はじめに育つ基本的信頼は、本来親となっています。子どもに人間の最小の愛を伝えるのが家庭です。平日は働いているお父さんやお母さんが、子どもに良かれと思って休日に色々なところに出掛ける姿を見ますが、子どもにとって家族みんなで「一緒」に過ごすことが、大切

です。仕事で疲弊しているのなら、のんびり過ごしてみんなでご飯を作るという「一緒」の過ごし方もあります。離婚したからといって子どもに申し訳ないという気持ちになっているひとり親もいますが、幸せになるために離婚をしたのですから、自分を責めなくていいのです。親が自己充実していて、笑顔で「一緒」に過ごしていることが子どもにとって一番の幸せなのです。

2つ目は、社会的信頼です。園や地域の人にどれだけ愛されたのかということが大切です。『子どもの声がうるさい』（虐待ではないという状況でも）と通報される環境では、子どもの知的好奇心は養われません。子育て家庭に理解がない地域の人の言葉によって、親も子も気を使いながら過ごすのでは、気が休まりません。そういう現状に置かれている保護者のことを私たち保育者は理解し、支援していく必要があります。

3つ目の自己信頼は自分の生活する家庭そして園、学校、会社という社会の中で自分を創っていく中で育っていきます。自己肯定感という育ちの土台には、それを保証する空間と時間となかまが必要で

## II. 親理解について・・・「孤独化・孤立化」等が生まれる背景

1, 高度経済成長期以降に育った親に育てられ、良い大学を出て、良い企業に就職することを目的とする傾向がある為、子育て中の価値が物やお金に置かれ、人間としての見えない部分（非認知能力の育ち）を重要視する文化が薄れています。

2、少子化・核家族化が進み、選別・学歴社会・自己責任社会の中で、人間関係が成り立ち、出来るか出来ないかという尺度で判断され、挫折を感じたときに周りの人に助けてもらったという経験がなく、人間関係が薄れたまま大人になり子育てをした時、自分と子どもとは違う人間であると言う事が、分かり難い状況が生まれています。

### III、子育て環境の変化

子育ては、一人ではできず、みんなに助けってもらって行う営みです。

昔の子育ては、隣近所から見て学ぶことも多かったのですが、現代は、人間関係が薄い中でわが子が生まれるまで、乳幼児期の子どもの様子を知らない人もいます。わが子の子育てを通じて初めて、自分自身の自己肯定感、人間関係力、選択能力が問われ悩みが増大し、不安や負担感・孤立が進み、不適切な養育・虐待・子どもの貧困等の問題が生まれる背景となっています。つまり子育てを取り巻く子育て環境(人間関係)が、大きく変わってきているのが、現代です。

**夫婦の関係** 父親が、子育てに関わる時間が少なくなっていて、母親が一人で子育てをしている家庭が増えています。働いている母親は日中、仕事人のプロとして働き、子どもを園に迎えに行き家庭に戻ると今度は母親としてのプロを求められます。昔は、家庭内労働だったため家の中にたくさん家族がいて、祖父母に協力してもらいながら子育てをしていましたが、今は母親一人に任されています。家族の形が、核家族化し家事や子育てをお手伝いしてくれる人がいません。

**地域の関係** 町内、近所付き合いが変化しており、子育てを温かく見守る目が少なくなっています。

#### **社会の関係**

消費社会になり、子どもにお金を使うことが多くなっています。教育研究者の太田堯氏は、「社会

的胎盤が豊かでないと子どもは育たない。」と語っています。子育て世代は社会の3割に減少しており、高齢化が進んでいます。子どもたちの幸せに対して不寛容な社会になってきてしまっていることが深刻な問題です。

### IV、現代的課題

2000年教育改革国民会議報告書では、「利己的な価値観、単純な正義感に陥り、時には虚構と現実の区別がつかなくなっている。また、自分自身で考え想像する力、自分から率先する自発性と勇気、苦しみに耐える力、他人への思いやり、必要に応じて自制心を発揮させる意思を失っている。」とあり、17の提案をしました。

それを踏まえて、2006年に教育基本法が改正され、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めることとする。」とあり、「子育ての第一義的な責任は、親にある」という風潮から子育てをしている母親は肩身が狭く、高い緊張が生まれ、まわりに「助けて」と言えなくなっている現状があります。

しかし、実際は、子どもたちは長時間親と一緒にいるのではなく、園に預けられています。ドイツでは、「子どもは、親と一緒に過ごすことで、人として育っていく権利があり、親には子どもと一緒に過ごすことで、親になる権利がある」といわれています。現在保護者の長時間労働は「親が子どもと一緒に過ごす時間」が短いことから、子どもの発達に大切な睡眠時間の確保が難しい状況を生んでいます。そしてそれは、保育者にも影響を与え保育者たちの疲弊度を深めています。養護性の高い乳児保育やプールや園庭での鬼ごっこなど幼児の高い運動量のあそび等、体力的にも精神的にも大変な保育者の労働環境があります。保育者の労働密度軽減は、質の高い

保育を創り出す状況に繋がり改善が急務です。

しかし『子どもの発達に必要な睡眠時間の確保』の問題は、保護者と保育者が頑張れば解決できるようなものではありません。社会で子どもを育つ時代おとなみんなが「子どもの最善の利益」を求めて、考えすべての大人が子どもの未来の為に、手をつないで「何ができるか」を考えて改善することが重要となっています。

## V. 保育・教育・・・人格の形成

乳児期は特に養護性が高く、自分の体について知って自立する時期です。お腹が空いているのかいっぱいなのか、おしっこが出たいのか出たくないのか、眠いのか眠くないのか等、自分の体に起きている変化に気づくことができるように保育者は子どもの体の変化に気づき言語化します。そうして大事に育てられ、1, 2歳頃になるとイヤイヤが始まります。これは、「大人の言うとおりになりたくない。」という心の独立宣言で、体と心の主人公になる大切な幼児期の土台を作る大切な表れです。

夕方子どもが疲れてケンカやイライラが募る子ども達など、どんな時も保育者は「子どものありのまま」の姿に共感し、子どもが意欲的に活動を創っていく力を促す指導が求められています。

## VI. 親へのメッセージ・・・子どもの身心に気づく

私たち保育者は、親の背景にある色々なことを知った上で向かい合い、親は何が出来、保育者は何が出来なのかを考えることが大切です。親には、とにかく子どもの心と体の変化に気付いてほしいと願い、以下のことを伝えています。

1. 子どもの話を聞くと子どもの心が見えてきます。まわりの声に振り回されていると、子育ての軸がずれてしまいます。
2. 子どもに向きあうことで、子どもが自分の気

持ちを表す言葉にたくさん出会えます。

3. 親だって失敗してもいいのです。完璧に子育てするよりも、子どもと楽しく笑い合えるのならば、時には家事は手を抜けば良いのです。今持っている力で、今を生きましょう。
4. 親の良かれは、誰のためか考えてみましょう。本当に子どもが望んでいるのか、自分の物差しを疑ってみることも必要です。

## VII. 楽しく子育てするキーワードは

### 1. ありのままの子どもに共感

園でのあらわれが気になる子どもの母との面談で、その子の母親に「我が子のことがかわいと思えない。親として何をすればいいか。」と聞かれました。そのとき私は、「園でのことは園が対応するので大丈夫。お家では、できるのなら、自己コントロールの力をつけていくのにつながるので、日々の生活のことを丁寧に行ってください。」と伝えました。具体的には、食事はできたものから食べるのではなく、全部出来上がって、家族が席についてからみんなで食べ始め、食べ終わったら席を立ち、自分の使った食器は自分で運ぶなど、大好きな家族のために自分のやりたいことを少しだけ我慢するという生活することで自己コントロールをする力が養われていきます。「～したかったんだね。」「でも今～したら、～になるね。」「次はこれにする？」と、子どもの願いについて否定から入らず、しかしそれは、子どもの言いなりとは違います。気持ちに共感することが大切です。言語性が優位になってくる4・5歳児には泣いて訴えてきたら「わかるよ。でも泣いていたらわからないから、泣き止むまで待っているね。」と言いましょ。せつかくの学びのチャンスですから、放っておくのは望ましくありません。まわり子どもたちがその泣いている子

の様子を見て「～だから泣いているんだ。」「～が嫌だったんだね。」と感じています。それが他者理解能力につながり、コミュニケーション能力にもつながっていきます。

## 2. 子育て仲間

園の懇談会などで保護者同士が語り合う場で母親たちがつながっています。

## 3. 子どもの心の意味を知る

親の良かれと思うことを押し付けないようにすることが大切です。親は、子育てを通じて親になります。

「乳児は、体を離すな 幼児は、手を離すな  
学童は、目を離すな 思春期は、心を離すな」

## VIII. 園でできる親支援とは？

### 本来もつ親の教育力を支える

保育者は、親のいろいろな背景や思いを考えながら共に子育てについて考えていく必要があります。子育ての知恵袋は、子育ての悩みの解決策を園の保護者に投げかけて、みんなで考えていくことで親の教育力を上げていきます。

### 子育てのネットワークの一員になる

#### 1. 親力アップ・子ども理解

子育てセンターの利用・保育者・園での親のつながりなど密着した人間関係の豊かさを子どもの周りに創ることで改善していきます。今行っている朝晩のちょっとした会話、ノート、子育ての知恵袋や保護者会のおたよりの交流などが大事です。

#### 2. 発達に課題を抱える子どもを育てる

子ども理解、対応、他機関との連携を考えていきます。「発達は専門ではない。」と考えるのではなく、豊かな連携のネットワークを創ることが第一です。

#### 3. 親の生活(労働時間・夫婦・ママ友・嫁姑)

夫婦関係が難しい中で悩んでいる親も多く

います。基本夫婦の問題は、2人の責任ですが、園で子どもに影響が見られたら園での様子を伝えながら「園では、こんなことを大事にしています。」と伝えます。そして、悩みを伝えられ、自分だけでは難しければ、他の保育者につなげて、一緒に考えていくとよいです。生活が苦しい、職場の人間関係で疲弊しているなど基本どの問題も、保育者は、一人で請け負わず、ザ・チーム（複数）で対応しましょう。

#### 4. 対応の原則

基本、保育者の価値を押しつけず、共感し傾聴することが大切です。結論は、親自身で出し、私たち保育者は、それを応援します。わからないこと、答えられないことは、わかったふりをせず、正直に伝え「〇〇先生に聞いてみましょうか。」とつなげていくとよいと思います。

保護者がありのままの自分を見せられる関係が望ましく「比べず、尺度を押し付けず、出来栄を問わず、相手のありのままを受けとめる」ことができるスキルを身に付けていきたいですね。

### おわりに

幼稚園教育要領・保育所保育指針などに、子育て支援・親支援が出てきたのは、90年代からです。それだけ、親が子どもを産み育てる環境がますます難しくなっているということです。

これからも「親理解」の学びを深め、保育者集団で対応し、保育者の知恵を豊かにしていくことが大切です。

第3回 焼津市保育者資質向上研修会  
令和4年8月19日（金）  
会場：焼津市役所 会議室1B